日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ

２０１４年　冬号　No.77　（2015年3月5日発行）

発行　日本行動分析学会　理事長　園山　繁樹
〒540-0021　大阪市中央区大手通2-4-1　リファレンス内
FAX：06-6910-0090（日本行動分析学会事務局と明記）　URL：http://www.j-aba.jp/
E-mail：j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第33回年次大会のご案内 ……竹内　康二
Kennon A. Lattal 教授講演会のお知らせ ……井垣　竹晴・山岸　直基
第８回国際行動分析学会（ABAI's Eighth International Conference）のご案内……国際委員会
正会員の皆様へ……研究教育推進委員会
行動分析学の歴史インタビュー③……Sigrid Glenn, Ph. D.
Glenn 博士へのインタビュー……是村　由佳
編集後記……ニューズレター編集部

日本行動分析学会第33回年次大会のご案内

準備委員長　竹内　康二　（明星大学）

2015 年 2 月の下旬に、日本行動分析学会第 33 回年次大会（2015 年 8 月 29 日～30 日、明星大学にて開催）の 1 号通信を会員の皆様に送付させていただきました。また、併せて大会 HP（http://www.hino.meisei-u.ac.jp/psy/j-aba2015/）を公開しましたので、こちらでも 1 号通信と同様の内容を確認することができます。日本行動分析学会の HP からもリンクしていますので、そちらから大会 HP に入ることができます。1 号通信および大会 HP に 33 回大会の予約参加申込と研究発表申込の方法が記載されていますので、ご確認いただければ幸いです。

予約参加と研究発表の**申込期限は 4 月 30 日（木）**となっていますので、期限までの申込をぜひよろしくお願いいたします。ご不明の点につきましては、日本行動分析学会第 33 回年次大会準備委員会のアドレス（j-aba2015@psy.meisei-u.ac.jp）にて対応いたします。

Kennon A. Lattal 教授講演会のお知らせ

井垣　竹晴・山岸　直基　（流通経済大学）

日時：2015年3月20日（金）17:00～18:30

この度、Kennon A. Lattal 教授（West Virginia 大学）が、平成 26 年度「スーパーグローバル大学創成支援」事業（慶應義塾大学）により３月中旬から下旬にかけて日本に滞在されます。この機会に Lattal 教授に、行動分析学（とくに実験的行動分析学）の展望と来るべき研究領域についてご講演いただくことになりましたのでご案内申し上げます。事前申込不要・参加費無料です。皆様のご参加をお待ちしております。

なお本講演会は、日本行動分析学会および日本基礎心理学会の後援を受けております。

講演者：Kennon A. Lattal 教授（West Virginia 大学）
日時:2015 年３月 20 日(金) 17:00～18:30
場所：慶應義塾大学三田キャンパス　研究室棟会議室Ａ（会場へのアクセスは、下記 URL をご参照ください。http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html）
司会：坂上貴之（慶應義塾大学文学部）

講演タイトル：Things We Don’t Know About What We Know About Behavior

講演要旨：Beginning in the 1930s with Skinner’s pioneering experimental analyses, our discipline has accumulated considerable data concerning the environmental variables responsible for behavior. This accumulated past constitutes our collective scientific present, and is an important part of the basis for considering our future. Scattered along the path to the present, however, are significant gaps in what we know about each of the five pillars of behavior analysis: its methods, and the processes related to reinforcement, punishment, stimuli correlated with consequences, and stimulus control. Research problems and issues rise and fall as a function of many variables: research priorities of investigators, universities, and funding agencies change; researchers identified with particular problems die or are otherwise distracted; and general events in the broader culture can conspire to change a discipline’s priorities. I will review a number of instances of disciplinary forgetting, change, and neglect in each of the aforementioned five areas. These include, among others to be considered, the study of behavioral transitions, superstitious behavior, autoshaping, conditioned punishment, and behavioral contrast. The significance of such instances will be considered in terms of future research and theoretical development in behavior analysis.

講演会終了後、懇親会を予定していますので是非ご参加下さい。（問い合わせ先は下記）

問い合わせ先：
慶應義塾大学　坂上貴之
（gami@flet.keio.ac.jp）
流通経済大学　井垣竹晴
（igaki@rku.ac.jp）・
山岸直基（yam@rku.ac.jp）

第８回国際行動分析学会（ABAI's Eighth International Conference）のご案内

国際委員会

日時：2015年9月27日（日）～29日（火）
会場：ホテルグランヴィア京都（http://www.granvia-kyoto.co.jp）
主催：国際行動分析学会（ABAI: https://www.abainternational.org）

国際行動分析学会（ABAI）が、二年に一回、世界各地で開催している大会がついに日本にやって来ます。毎年米国で行われている年次大会に比べて規模が小さいぶん、世界の行動分析家と密なコミュニケーションができる格好の機会です。

この大会には、毎回、世界中の三十近い国や地域から行動分析家が集まります。行動分析学の実験的、応用的、理論的な研究、哲学、実践まで、幅広く、深い議論が展開される大会です。

年次大会に比べると、実践家より研究者の割合が高い傾向があり、若手から大御所まで、著名な研究者も数多く参加します。「あの論文の著者と直に話ができた！」という体験ができる確率が高い大会です。自国開催時に参加できるというメリットをぜひ享受して下さい。

公式言語は英語です。参加や発表の申込みは ABAI の web サイトで受け付けています。参加費には早割、学生割引があります（一般は$320、学生が$120）。

発表申込みの〆切は 2015 年 3 月 18 日（水）です。

プログラム：

9/27（日）
13:00-17:30 チュートリアル（日本語講演、英語への通訳あり）
18:30-20:30 開会式と懇親会

9/28（月）
8:00-12:30 招待講演、小会議
14:00-17:00 招待講演、小会議
17:30-19:00 ポスターセッション

9/29（火）
8:00-12:30 招待講演、小会議
12:30-13:30 閉会式

参加申込み、発表申込みは ABAI のサイトからお願いします。
https://www.abainternational.org/events/international/kyoto-2015.aspx

参加申込みは「REGISTER NOW」をクリックして進んで下さい。
発表申込みは「SUBMIT CALL FOR PAPERS」をクリックして進んで下さい。

申込みには ABAI サイト（ABAI Portal）への登録が求められますが、登録は無料で、ABAI の会員登録は必要ありません（大会参加費とは別に会費を徴収されることはありません）。

発表も同じです。ABAI の会員にならなくても発表することができます。

会場であるホテルグランヴィア京都（JR 京都駅直上）には、会期中、学会特別料金で宿泊できます。予約は、ABAI サイトの「Hotel」からリンクをたどって下さい（現在、リンクがわかりにくくなっています：「Hotel Granvia Kyoto」をクリックして下さい）。宿泊予約サイトは英語表記になっていますが、料金は日本円で表示されています。なお、料金は部屋単位の価格です。一部屋に何人で宿泊しても同じ料金ですから、学生諸君はルームシェアをして経費節約できますよ。

https://www.abainternational.org/events/international/kyoto-2015/hotel.aspx

京都 ABAI は日本行動分析学会の「日本在住学生会員への参加助成」対象となっています。今回、一人一万円、50 名分の予算が確保されています。ふるってご応募下さい。応募条件など詳しくは下記のサイトをご参照下さい。

http://www.j-aba.jp/award/assist.html#top2

お問合せは ABAI 事務局まで（但し、英語です）：

E-Mail: convention@abainternational.org
Phone: +1 (269) 492-9310
Fax: +1 (269) 492-9316

＜研究教育推進委員会より＞

正会員の皆様へ

研究教育推進委員会

今年度も日本行動分析学会実践賞の選考の時期となりました。
実践賞は、行動分析学を応用した優れた実践の普及を目的として設けられた賞です。
締切りは2015年４月30日（木曜日）です。送付先は学会事務局まで。

皆様のご推薦をお待ちしております。
詳しくはこちらをご覧ください。
http://www.j-aba.jp/award/index.html

＜行動分析学の歴史インタビュー③＞

Evolution of a Behavior Analysis Department: How it was formed, and where it is going to be

Sigrid Glenn, Ph. D. (University of North Texas)

2013 年 5 月、国際行動分析学会期間中に、ミネソタ州ヒルトンミネアポリスホテルでインタビューを行いました。グレン先生の詳しい業績については、先生のホームページ[*1] をご参照下さい。

１：Introduction

インタビュアー（以下、イ）：日本行動分析学会のインタビューを快くお引き受け下さりありがとうございます。私たちは、日本の若い世代の行動分析家に紹介したい海外の行動分析家の、歴史的背景などをインタビューしています。

Glenn 博士：このようなインタビューは非常に光栄です。

イ：そう仰っていただきありがとうございます。私も母校の先生に、このような形でインタビューできることを光栄に思います。さて、インタビューにあたり、行動分析学の歴史における業績と、ご自身についてわかるように先生の職務経歴書（Vita）を参考にいたします。先生は現在、北テキサス大学[*2] の指導教授でいらっしゃいます。北テキサス州立大学で臨床心理学の博士号を取得されました。

Glenn 博士：現在の北テキサス大学です。

イ：そして、Center for Behavioral Studies を創設した Don Whaley 教授の亡き後、1983 年に引き継がれました。その後センターを行動分析学部に成長させたのですね？

Glenn 博士：そうです。

２：The encounter with behavior analysis

イ：それでは、どのように行動分析学を専攻されたのですか？職務経歴書を拝見する限り、学部生時代は、州都オースティンにあるテキサス大学で演劇学科を専攻されていましたよね？

Glenn 博士：そうです。

イ：何故、最終的に北テキサス大学のある州都から程遠いデントンに移り、臨床心理学を専攻されたのですか？

Glenn 博士：演劇で学士号を取得してから、何年かは教えていました。その後ニューヨークへ移り、演劇もしていたのですが、ずっと図書館に通い続けて本を読んでいて、読む本読む本が心理学の本でした。なので、きっと心理学が自分の興味がある分野に違いないと思いました。それから大学院へ行き、臨床心理学を専攻しました。大学院では、最初の年に Don Whaley と出会いました。彼は、完全に私の考え方を 180 度変えた B. F. Skinner の”Contingencies of reinforcement”を私に手渡してくれたのです。

その時から私は radical behaviorist になったのです。

イ：それが行動分析学との最初の出会いだったのですね？

Glenn 博士：そうです。それが行動分析学との最初の出会いでした。そしてその日から過去を振り返ることはありませんでした。それから、臨床心理学で博士号を取得し、Center for Behavioral Studies に勤務しました。実は、博士号取得中から働いていました。センターには自閉症介入のプログラムもありました。私も実際約 10 年従事していたのですよ。

イ：そうなのですか？

Glenn 博士：ええ。自閉症児から非常に多くのことを学びました。

イ：そうでしたか。ここからは、センターの創始者である Donald (Don) Whaley 先生のお話をお伺いします。

Glenn 博士：彼は、頭脳明晰でした。重いぜんそくを持ち、体重を減らすことがいつも難しそうでした。健康ではなく、若い頃に喫煙していたので、ぜんそくには良くありませんでした。肺気腫だったかもしれません。しかし彼はとても優秀で素晴らしく、大変なカリスマ性もありました。キャンパスを子犬のように Whaley 先生を追っかけるたくさんの人がいました。それはまるでハーメルンの笛吹きのようでした。そして、彼はセンターを始め、自閉症介入プログラムを作り、他のプログラムも作りました。一つはカウンセリングを行う、The Behavior Exchange Clinic でした。1979 年ごろから深刻な困難が続き、センターを閉め始めました。1983 年までには、プログラムに在籍する自閉症児がいなくなり、あらゆる手を尽くしたのですが、センター全てを閉めました。それから彼は School of Community Service の教授職に専従しました。そして 1983 年 10 月、彼は突然亡くなりました。本当に予期していませんでした。49 歳でした。若すぎます。私は学部長から、彼が教えていた教科を教えるよう頼まれました。当時、行動分析学の科目が４つありました。

イ：センターはなくなったのですか？

Glenn 博士：(笑い) 私だけでした。Janet Ellis はいました。しばらくいなかった時期がありましたが。彼女と私で・・・まず私が、準備が整ったら彼女が戻って来るという前提で始めて、彼女を取り戻して、二人一緒に働きました。それから何人かを迎え入れて・・・ちょっと待って。現在、このことについて本を書いています。

イ：そうなのですか？

Glenn 博士：ええ。インターネットに公開するつもりです。なので、これらのこと全て読めるようになります。

イ：素晴らしいです。

Glenn 博士：本は大長編になります。本の半分は Don Whaley が亡くなる前で、残りの半分は彼の死後です。

イ：とても楽しみです。

Glenn 博士：何年か前に書き始めました。今は大体、第 3 部に達しています。

イ：スキナーの自伝も 3 部作でしたね。

Glenn 博士：そうでしたね (笑い)。

３：Founding the first “Department of Behavior Analysis”

イ：センターのプログラムは、Dr. (Janet) Ellis と Dr. (Joel) Greenspoon で発展させたのですか？

Glenn 博士：そして、Cloyd Hyten です。長い間、Cloyd と Janet と私の 3 人でした。そして Dr. Greenspoon が来ました。彼は退職していましたが、私たちのためにいくつかのクラスを教

えてもらっていました。彼がいて本当に良かったです。それから教員を増やしていきました。

イ：なぜ修士課程が強烈なのか教えていただけますか？例えば、インタビュアーが在籍していた頃は、大学の修士課程で必要とされる最低単位を遥かに越えていました。最初からそうだったのですか？そしてそれは何故なのですか？

Glenn 博士：行動分析学は、心理学の一分野としては教えることが多すぎると思っています。心理学のプログラムに在籍していたら、更にたくさんのことを学ぶ必要があり、行動分析学については大して学べません。本当にちょっぴりです。それでは行動分析学を学ぶには全く十分ではないということを知っていたからです。行動分析学を学ぶには intensive work が必要とされます。ですから、修士課程はそのようにしたかったし、卒業生には、ちょっぴり行動分析学を知っていますではなくちゃんと行動分析家に、リアルな行動分析家になって欲しい。１つの分野だけ出来るのではなく。在籍中に２つの実習を必須にしているのは覚えているでしょう。

イ：はい。

Glenn 博士：行動は行動であり、２つの異なった分野で、同じように機能します。しかし２つの異なった分野で実践しない限り、それを理解できません。全ての分野をまたいでみなければわからないのです。だから、本当に intensive なプログラムであることが重要なのです。ABA（当時の名称：国際行動分析学会(ABAI)のこと）認定プログラムは、コンセプト、基礎実験、応用のコースが必要です。私たちのプログラムは全て含んでいますし、その上、偏りのない、本当に良い行動分析家にする為に必要だと思うことを加えています。そして、学生達は非常に素晴らしい成果を上げていると思っています。

イ：そうですか。自身としては、北テキサス大学で学んだことが役立っていると思います。

Glenn 博士：そして、対象の置かれている状況も学ばなければなりません。自閉症児への介入をしているのであれば、自閉症児を知らなければなりません。また、子どもについても学ばなければなりません。しかし、それらを学んだら、行動分析を適用すれば良いことを学んでいます。ともかく、もし自分のことを「行動分析家」と呼ぶならば、それなりに幅広い基礎知識が必要だと思ったのです。ですから、修士課程を修了するのに時間がかかるのです。そう言う訳で、ほとんどの修士課程のどこよりも長いのです。北テキサス大学の修士課程の最低必要単位は36単位です。42 単位の修士課程のプログラムはほとんどありません。私たちの修士課程は、42 単位と、48 単位です。とても長い修士課程です。

イ：応用コースの単位の方が多いですね。

Glenn 博士：応用コースが 48 時間です。

イ：そうでした。アメリカ人の学生でも、2 年では修了できなかったのを覚えています。

Glenn 博士：これまでに基礎コースで 1、2 人いました。基礎コースを選択する学生はだいたい他大学の博士課程に進学しています。

イ：そうですか。

Glenn 博士：そのうちの一人が Kathryn Mistr です。最初の世代の学生です。事実、彼女が修士論文を書いた最初の学生で、その修士論文は、Analysis of verbal behavior 誌に掲載されました。

イ：しかし、博士課程はありませんね。

Glenn 博士：ありません。これに関しては、機会を逸した感じです。いつか実現すると期待しています。

イ：博士課程を持つことはあきらめていないのですね。

Glenn 博士：個人的に博士課程を持つ必要があ

ると思います。修士号であれだけ単位を取っていたら、もう少し頑張って博士号を取得しても良いのでは、と。

イ：行動分析学の哲学的、倫理的、概念的側面を実践介入とともに修士課程で学ぶことは、非常に豊かで中身が濃いと思います。

Glenn 博士：そうです。

イ：もしプログラムが博士課程を持ったら、研究を重視することになるのでしょうか。

Glenn 博士：そうです。多くの研究ですね。たくさんの教科は必要とはしないでしょう。恐らくいくつかのセミナー形式のクラスでしょう。しかし、主には、たくさんの研究をすることです。

４：Transition of the Department: Cultural evolution

イ：しっかりした基盤と同時に学部の健全さも発展します。それについてはどうお考えですか？インタビュアーは、年々学部が変わって行くのを見てきました。プログラムを立ち上げた当初と比べて、現在の学部はどのような変化があったとお思いですか？特に感じる部分を教えて下さい。

Glenn 博士：私はこれまでの過程を３つのステージに分けています。最初のステージは先程述べた通り、Cloyed Hyten, Janet Ellis, myself, and Joel Greenspoon で教えていた期間です。６年ほどでした。私たち３名と、客員教授の Joel でした。それから、Rick Smith と Jesus Rosales, が、少し後に Shahla, と Manish が加わりました。ここまでを第 2 ステージだと考えています。

イ：その時期に在籍していました。

Glenn 博士：最初のステージに比べると幅広いステージでした。たくさんの実習の機会があったからです。最初の 3 人の時点では、そんなにたくさんの実習の機会はありませんでした。Rick と Jesus、その後に Shahla と Manish が来てからは、幅広い、たくさんの機会を学生に与えることが出来ました。この時期に学生は本当に目立ってきました。今や、最初の 4 名がいなくなりました。あっという間でした。1 年半の間に、Cloyd, Janet と私が常勤ではなくなりました。Joel は少し前に亡くなっていました。これはとても急な変化でした。そしていなくなった３名分を補充することは出来ませんでした。まずたった１人、Traci Cihon を雇用できました。そして、1、2 年待って、John Pinkston を雇用できました。そしてまた 1、2 年待って、Karen Toussaint を雇用できました。これでやっと 7 名の教員体制に戻ったのです。しかし、違う７名です。ですからある意味、私の理解の及ばない変化があります。現在、私は修士課程での採用のプロセスには関与していません。既に修士号を持ち、BCBA の取得又は維持のための e-learning[*3] のプログラムのみを実施しています。リタイヤしてから、e-learning に集中していましたが、これも学部の中での大きな変化です。20 年の安定ののち、大規模な人員の変換が短い間に起きました。興味深いですが、私からはとても上手く行っているように見えます。私の知る限りでは、学生が学び、ハッピーです。

イ：プログラムに在籍している学生数はいかがですか？変わっていませんか？

Glenn 博士：ずいぶん前は、各学年最高 20 名でした。そうであることは今でも変わりません。7 名の教員で、20 名の修士課程の学生、そして 3 年のプログラム・・・これが限界です。そしてこのサイズは変わりません。

イ：私が在籍した時には 20 名の定員の始まりの時期だったと思います。

Glenn 博士：そうです。詳しくは覚えていませんが。初年は6名でした。それから 12 名になり、

12～15 名の時期が 5 年ほど続きました。それから 20 名になり、以来ずっと 20 名です。

イ：戦略のプランなどがあったのですか？

Glenn 博士：いいえ。皆プログラムについて理解するのに時間を要しました。北テキサス大学で行動分析学の修士課程を始めるということを国内の行動分析の仲間に伝えた時、「行動分析学の修士は有用であるという手紙を書いてくれませんか」と頼みました。相当数の返信が、「行動分析学修士を持つ学生は仕事に就けると思いません」というものでした。彼らは心理学や、社会学、教育でもない分野の学位を持つことに懸念を示しました。そして私は「学生たちは就職できると思いますし、人々は行動分析を必要としていると思います」と言いました。もし彼らが「行動分析家」と呼ばれれば、行動分析家として仕事ができるのです。ですから、私たちはともかくやってみて、うまくいきました。最初から、全国的に学生を受け入れました。テキサス州からはほとんど来ませんでした。

イ：そうなのですか。

Glenn 博士：最初の何年かは、デントン在住、もしくは北テキサス大で学士を取得した学生はいませんでした。最初の 4 名の学生は、Greg Madden、Doug Field、 Vicki Ford、 Manish Vaidya でした。同時に、学際的な修士プログラムに所属していた何名かの学生もいました。その中に、Guy Bruce と Leslie Burkett がいました。プログラムの２年目には、行動分析学の修士プログラムがあるという噂が広まり、各地から来ました。最初の学生達が卒業してからは、学生が本当に来るようになりました。そのうちに、世界中から学生が集まりました。ノルウェー、イギリス、アイスランド、中国、ブラジル、コロンビア、そして日本から！

イ：笑い。そうですね。私もその１人でした。他大学にこのようなプログラムをお勧めしますか？

Glenn 博士：お勧めします。第１に学生は明確によいトレーニングを受けます。良い仕事を得て、良い収入を得ています。そして向上心があります。ABAI の年次大会に参加しています。卒業したら学会参加しないことが多いのですが。このプログラムの卒業生は ABAI に参加します。私にとってはそれが指標です。もしプログラムの卒業生が ABAI に参加したら、これだけではないですが、その他を含めてよいトレーニングを受けたということだと思います。

イ：ABAI は行動分析のコミュニティーですから。

Glenn 博士：多くの仲間と交流できるコミュニティーです。専門分野について深めるのも大事ですが、興味がどの分野にあっても、行動分析学の動向を知ることが出来ます。先程話したように、良い行動分析家になれば、ある所で学んだことを、別の所で役立てることが出来ます。私たちのプログラムの卒業生が ABA に来続けるのは、幅広い視野を持つトレーニングを受けたからだと思います。そう言う意味では、もっと多くの行動分析学部があったら良いなと思います。現在いくつかがあります。ニューイングランド州に一つ行動分析学部があります。それから、シカゴの心理学専門大学に行動分析学部があります。現在はいくつかあります。とても嬉しく思います。個人としては、行動分析学部が実現可能であり、機能しているところを見ることが出来て、そして実現の助けになったことは本当に喜ばしいです。

イ：再現性ですね。

Glenn 博士：もっともっと成長して欲しいです。

イ：文化的な随伴性ですね。

Glenn 博士：そうです。

イ：この行動分析学部は淘汰に耐えましたね。

Glenn 博士：日本はどうですか？日本で行動分析学部は創設できますか？

イ：アメリカと制度が違いますしわかりませんが、大学の新設や、学部名を変更するなどを見たりしますので、可能性はないことはないのだと思います。

Glenn 博士：それは良い機会です。動くべきです。私は本気ですよ。良い機会です。私たちは機会をうかがわなければなりませんでした。幸運にも比較的自由な大学にいました。枠から外れているようなものでした。それが、私たちがやったことを試してみるようなところです。「やってみましょう。そして、もし上手く行かなければ、中止すれば良いのです」と言えばいいのです。失うものはありません。

イ：一つのアイデアですが、日本行動分析学会が全体として行動分析のプログラムを持つような戦略的プランを持つのはどうでしょう、とか思ったりします。

Glenn 博士：良いですね。プログラムは良いと思います。学部はさらに良いです。私たちは学部になる前はプログラムでした。学部になる 6 年前に行動分析学修士を創設しました。コミュニティーサービス・スクールの行動分析学センターでした。それから、学部として受け入れられました。２つを同時に始める必要はありません。プログラムを先に持ち、それから学部を持てば良いのです。

イ：そうですね。このインタビューののち、今後はどうなるのでしょうね。

Glenn 博士：そうですね！楽しかったです。ありがとう。

５：Message to Japanese behavior analysts

イ：どうもありがとうございました。最後に一つ、日本の行動分析家の皆さんにメッセージをお願いします。

Glenn 博士：たくさんの日本の行動分析家にお会いしてきました。そしてとても良い印象を受けています。もし、日本行動分析学会が戦略的なアプローチでどこかにプログラムを設立したら、きっと行動分析学部が、そうでなくてもまた他の形で設立できると思います。もし日本の行動分析学で実現したら、米国にも大きな影響があると思います。米国でも行動分析学はあまりないからです。米国は大きいです。ABAI が大きいので行動分析学も大きいと思いがちです。しかし、他の領域の他のプログラムに比べれば、米国内ではとても小さいです。他の分野の中にいたら、あなたは追い払われてしまいます。ですから、私たちは独自のプログラムが必要です。なぜならもしあなたが独自の分野にいたら、皆あなたを取り除くことは出来ないからです。ですから私たちは独自のプログラムが必要です。ブラジルやノルウェーはそれぞれ優秀なプログラムを確立しつつあります。日本でも行動分析学を発展させる力があります。ですから、個人的には日本とブラジルとノルウェーは私たちの未来だと思っています。

イ：ありがとうございました！

注）参考 URL

*1 Dr. Glenn のホームページ
http://sigridglenn.org/　公式 HP です。

*2 北テキサス大学行動分析学部
https://pacs.unt.edu/behavior-analysis/
公式 HP です。現在の教員のページは http://pacs.unt.edu/behavior-analysis/faculty-and-staff です。

*3 e-learning 行動分析学オンラインコース
https://bao.unt.edu/BAO/bao_overview.html
BCBA 受験のためのコース、それ以外の行動分析学のコース、BCBA 取得後の資格維持単位（CEU）のためのコースの 3 部門から選択できます。

インタビュー日：2013 年 5 月 25 日（第 39 回国際行動分析学会年次総会期間中）
インタビュー場所：Hilton Minneapolis Hotel
インタビュアー：是村由佳
インタビュー補助：近藤鮎子

Glenn博士へのインタビュー

ニューズレター編集委員　是村　由佳　（株式会社コレムラ技研バラスト）

2013 年冬号に掲載した Pennypacker 博士へのインタビューと同じ第 39 回国際行動分析学会年次総会期間中に、お時間を頂きインタビューをしました。紙面に掲載するにあたり、関連のホームページの URL を文末に掲載しました。右上に注として「＊番号」を記しましたのでご参考下さい。Glenn 博士の主な経歴は文中に記載されていますが、詳細についてのお問い合わせは、J-ABA ニューズ編集部までご連絡下さい。

インタビューの構成として、１）行動分析学を学んだ経緯、２）興味のある研究、３）日本の行動分析家へメッセージ、の 3 点を軸にして、ざっくばらんにお話ししていただきましたが、２）については、興味のある研究についてではなく、他にはなかった行動分析学単体の学部を創設した背景や経緯についてお話を伺いました。

深くお話を伺うことができなかったのですが、Glenn 博士は、学部の創設だけでなく、e-ラーニングの創設もパイオニアの一人です。約 15 年前から e-learning を推進しています。教科の遠隔地教育から始まり、現在では文脈を 3 つに分け、それぞれに合わせたコース内容を充実してきました。行動分析家になるまでのご自身のキャリアの変遷を含め、その後の学部の創設や e-learning の創設経験から、インタビュー中で「チャンスがあるのならまずやってみる」ことを強く奨励されていたのでしょう。大変力のこもったお言葉でした。

今回、この機会に、行動分析学部の成り立ち、どのような方向性の中、どのように整備されてきたかについてインタビューし、知ることができたのは個人的にも大変勉強になりました。Glenn 先生は丁寧に、渦中に関わった多数の人名をあげていらっしゃいました。皆様にも、組織形成と成長と普及と sustainability、また、カリキュラム開発の方向性、などについての一つの実践例としても読んでいただければ幸いです。

編集後記

本号の、Lattal 教授の講演会のご案内は、3 月 20 日（金）です。ぜひご参加ください。また、8 月 29 日～30 日に明星大学での第 33 回年次大会、9 月 27 日～29 日に京都での第 8 回国際行動分析学会のご案内があります。2 カ月連続で国内、国際学会が日本で行われることはなかなかないチャンスですので、皆様ふるってご参加下さい。

また実践賞については、皆様の御推薦をお願いいたします。

今回は、海外の行動分析学者へインタビューの２人目を掲載いたしました。渦中にいるときには見えなかったことが、今回で見えたことは今後に活かしたいです。前回に引き続き、インタビューの補助をして下さった近藤鮎子さん、本当にありがとうございました。

（YK）

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャグやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒582-8582　大阪府柏原市旭が丘4-698-1
大阪教育大学 大河内研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
大河内 浩人
E - mail: okouchi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp